
 学内活動報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 5
P.102-111 (2017)

マインドマップを活用した地域診断演習の試み

Attempt to Utilize Mind Map in Community Diagnosis Exercises

酒 井 太 一* 岩清水 伴 美* 江 口 晶 子*
SAKAI Taichi IWASHIMIZU Tomomi EGUCHI Akiko
土 屋 陽 子* 鈴 木 みちえ*
TUCHIYA Yoko SUZUKI Michie

1. はじめに

地域診断は、厚生労働省が平成 25 年に示した「地域における保健師の保健活動に関する活動指針」¹⁾において保健師の保健活動の基本的な方向性の筆頭に挙げられた。その具体的な内容としては「保健師は、地区活動、保健サービスの等の提供、また、調査研究、統計情報に基づき、住民の健康状態や生活環境の実態を把握し、健康問題を明らかにすること（地域診断）により、その健康課題の優先度を判断すること。」とあり、地域診断は保健師としてその責務を全うする上で重要な実践能力であるということがあらためて明示されたといえる。同様に、保健師基礎教育においても地域診断に該当する内容は高い到達レベルが求められている。同省の「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」²⁾では、保健師に求められる 5 つの実践能力の一つとして「地域の健康課題の明確化と計画・立案する能力」が挙げられ、その能力に求められる卒業時の到達レベルは「少しの助言で自立して実践できる」レベルあるいは「指導保健師や教員の指導のもとで実施できる」レベルと位置付けられている。

保健師基礎教育を担う教育機関において、地域診断に関する教育方法については演習³⁻¹⁴⁾、実習¹⁵⁻²⁰⁾のいずれにおいても数多くの検討や工夫が報告されている。報告されている地域診断の演習・実習の内容としては、既存資料の収集・整理、地区視診や地域住民あるいはキー・インフォーマントへのインタビュー、情報の分析・アセスメント、活動計画の立案など、これらの一部あるいは全てが含まれている。また、さらに健康教育までが含まれている演習^{3,5)}や、個別事例から地域課題を見出す現場の保健師の実践的思考をたどることを意図した演習¹³⁾などもあり、各教育機関では意欲的・先進的な取り組みが常に研鑽し続けられている。これらの報告においては、様々な工夫による効果と同時にいくつかの課題についても言及されている。その中でも特に学生に対する課題としては、生活実態との関連性を推測できる力量を育成する必要性¹⁹⁾や、生活経験の少ない学生に対して対象者がイメージできるような具体的な助言や情報を統合する思考過程への支援の必要性⁹⁾が指摘されている。確かに、これらのことは教育実践の場面において教員として感じることであり、地域診断の初学者にあたる学生がこれらを効果的に学ぶために十分な工夫が求められる。そこで、その工夫の一環として順天堂大学保健看護学部（以下、本学部）では、地域診断演習の中で学生が実際に地域に出かけ

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

(Nov. 11, 2016 原稿受付) (Jan. 20, 2017 原稿受領)

て地区視診や地域住民へのインタビューを行った後の振り返りにおいてマインドマップの活用を試みている。

マインドマップとは概念地図法の一つで、これを考案した Tony Buzan は「放射思考（中心点から連想的に思考を広げていくこと）を外面化したものであり、脳の自然な働きを表したもの」²¹⁾とする。この方法はあらゆる用途に使用でき、学習能力を高めたり、考えを明らかにしたりするのに役立ち、生産性の向上が可能になるとされている。看護師基礎教育においては、看護過程演習²²⁾や実習カンファレンス²³⁾、学生自身による患者との関わりの振り返り²⁴⁾におけるマインドマップの活用が報告されている。一方、保健師基礎教育や公衆衛生看護科目においてマインドマップの活用の試みは見当たらない。そこで、地域診断演習におけるマインドマップの活用について教育実践を振り返り、その効果と課題について考察する。

なお、本稿では「地域診断」、「地区視診」の用語は、「地区診断」「地域看護診断」、「地区踏査」などの他の類語とは厳密に区別せず、これらを包括する用語として位置付けて用いることにする。これらの厳密な区別や定義については他稿に委ねたい。

II. 地域診断演習におけるマインドマップの活用の実際

1. 公衆衛生看護科目及び地域診断演習の概要

本学部における公衆衛生看護科目の一覧を表1に示した。地域診断演習は、3年前期の講義・演習科目である「公衆衛生看護学活動論Ⅱ」に含まれている。「公衆衛生看護学活動論Ⅱ」の目的は、公衆衛生看護活動の基盤となる地域で生活する人々の健康課題を明らかにするための地域診断の意義と方法を理解し、地域特性に応じた支援計画の立案・実施・評価のプロセスについて演習を通して具体的に学ぶことや、健康課題に対する地域の組織的な取り組み、保健医療福祉計画と公衆衛生看護活動との関連について学ぶこととして

いる。なお、3年後期には地域診断演習と同じ市町村にて「公衆衛生看護実習Ⅰ（地域診断実習）」を行う。講義・演習から継続した市町村で実習することでさらに学びを深められることを意図している。

表1 本学部における公衆衛生看護科目一覧

学年	講義・演習科目	実習科目
2年	公衆衛生看護学概論	
	公衆衛生看護学活動論Ⅰ	
3年	公衆衛生看護学活動論Ⅱ ※地域診断演習を含む	公衆衛生看護実習Ⅰ ^{注1)} (地域診断実習)
	地域生涯保健活動論	公衆衛生看護実習Ⅱ ^{注2)} (保健活動実習)
	学校・産業保健活動論	産業看護実習
4年	地域健康危機管理論	看護総合実習 ^{注3)}
	地域ケアシステム論	

注1 地域診断演習と同じ市町村にて実習を行う。

注2 学生の一部は4年で履修する。

注3 各看護領域から一領域を選択する。

地域診断演習の目的は、地域の特性を踏まえた保健活動を展開するために人々の暮らしに関連する情報を整理・統合し、健康課題を明らかにする地域診断技術の基礎を学ぶことにある。この演習の具体的なスケジュールを表2に示した。まず学生は4～6名のグループで、静岡県東部の市町村1つを担当する。全7コマのうち、4・5回目は市町村に地区視診（地域住民へのインタビューも含む）に出向き、6回目において地区視診の振り返りを行う。具体的なワークの進め方は、オリエンテーションの後に、グループによるウォーミングアップ、個人によるミニ・マインドマップとフル・マインドマップの作成、グループメンバー

表2 「地域診断演習」の演習スケジュール

回数	演習内容
1	個人学習 地域診断の概念・地域診断の過程の確認
2	既存資料を活用しての地域特性の把握
3	既存資料を活用しての地域特性の把握（前回続き） 地区視診計画立案
4・5	地区視診（地域住民へのインタビューを含む）の実施
6・7	マインドマップによる地区視診の振り返り 地域診断まとめ

表3 マインドマップを用いた地区視診の振り返りワークの進め方

学習形態	項 目	内 容	備 考	所用時間の 目安 (分)
1 全 体	オリエンテーション	ワークの流れとマインドマップについての説明。	マインドマップは思考を整理するためのツールであることを伝える。	5
2 グループ	ウォーミングアップ	1) 教員が適当なテーマを与え、そのテーマから連想される言葉をグループメンバーで出来るだけ多くA4用紙に書き出す。	与えるテーマは、例えば「夏休み」等の学生にとって身近なものにする。グループ間で連想した言葉数を競わせる等の工夫をすると学生の取り組みが一段と高まる。	3
		2) 類似した言葉を3〜7つのカテゴリーに分け、カテゴリー名を命名する。		5
		3) 教員が指名した1〜2のグループがその内容をクラス全体に紹介する。		2
3 個 人	ミニ・マインドマップ ^{注1)} の作成	1) 地区視診を想起して連想される言葉を出出来るだけ多くA4用紙に書き出す。	ウォーミングアップと同じ要領で行うことや、特に連想を用いることについて改めて伝える。	5
		2) 類似した言葉を3〜7つのカテゴリーに分け、カテゴリー名を命名する（キーワード、BOI ^{注3)} の決定）。		5
4 個 人	フル・マインドマップ ^{注2)} の作成	1) 地区視診を想起した際に頭に浮かぶイメージをA3用紙の中央に描く（セントラル・イメージを描く）。	セントラル・イメージの絵の上手・下手は気にしないこと、3色以上のカラーペンを使ってカラフルに描くことを伝える。	15
		2) セントラル・イメージにメイン・ブランチ ^{注4)} を描き、その上にBOIを加筆する。あとは、枝（線）を伸ばしながら連想したキーワードを加筆し続ける。	可能であれば連想したキーワードにもイメージ（絵）を加えてみることや、重複したキーワードがあっても構わないことを伝える。	20
		3) マインドマップを俯瞰し、自治体の特徴を短文表記する。		5
5 グループ	プレゼンテーション	グループメンバー同士でマインドマップを用いて地区視診について相互にプレゼンテーションする。		20
6 個 人	感想の記述	マインドマップを描いたことについて感想を記述する。		5
				合計約90分

注1 ミニ・マインドマップ：思いつくままにアイデアを書き留めるためのマインドマップ。

注2 フル・マインドマップ：通常のマインドマップ。

注3 BOI：Basic Ordering ideas, 基本アイデア。メイン・ブランチ上に記入するキーワード。

注4 メイン・ブランチ：セントラル・イメージから直接伸ばす太い枝のような曲線。

同士によるプレゼンテーション、そして最後にワークの感想の記述を行い、この合計時間は約90分（1コマ）である（表3）。なお、「ミニ・マインドマップ」と「フル・マインドマップ」の用語については、前者は思いつくままにアイデアを書き留めるためのマインドマップであり、後者が通常のマインドマップである。

マインドマップの一つのポイントとして「放射思考」と呼ばれる中心点から連想を用いて思考を広げていくことが挙げられる。ただし、学生にとっては「連想」という思考法は馴染みが薄いため、これを体験的に理解するためにグループによる連想のウォーミングアップを行う。ウォーミングアップでは教員が適当なテーマを与え、そのテーマから連想される言葉をグループメンバーで一定時間内にできるだけ多く書き出す。このウォーミングアップによって、連想が不得手な学生も他の学生をモデルにして無理なくそのコツを掴むことができる。このようなウォーミングアップは、この

後に個人でマインドマップを描くことを円滑に進めるために重要な過程であり、欠かすことはできないと考えている。

マインドマップの具体的な描き方の手順も表3に示した。教員はファシリテーターとして各手順をリードする。なお、これらの描き方の手順は一般的なマインドマップの描き方を遵守している。ただし、本学部における独自の工夫としては、フル・マインドマップを描いた後に地区視診した市町村の特徴を短文で表記することになっている。これはマインドマップを描いた後にもう一度全体を俯瞰する機会を設けることを意図している。そして、全ての作業が完了後には、学生にマインドマップを用いたワークについての感想を記述することも求めている。

2. 学生が描いたマインドマップ及びワークの感想

本稿で紹介するマインドマップや感想は、平成27年度に「公衆衛生看護学活動論Ⅱ」を履修した学生

から提出されたマインドマップと感想、全119件のから、著者及び共著者である公衆衛生看護領域の教員が代表的なものを任意に選定したものである。なお、後述の学生の描いたマインドマップ例(図1)2点は作成者である学生に掲載協力の依頼をしてその同意を得たものである。その際には倫理的配慮として、本稿の概要、マインドマップ掲載の方法、掲載協力は自由意思であり協力しない場合にも一切の不利益を受けないこと、同意した場合でも原稿提出前であればこれを撤回できること、個人を特定できる情報を削除し画像データは目的外の使用はしないこと等を口頭と書面にて説明し同意を得た。また、この依頼は当該科目の履修完了し成績が確定した後に行い、強制性が生じないことにも配慮した。

1) 学生が描いたマインドマップ例

学生が実際に描いたマインドマップ2点を例として

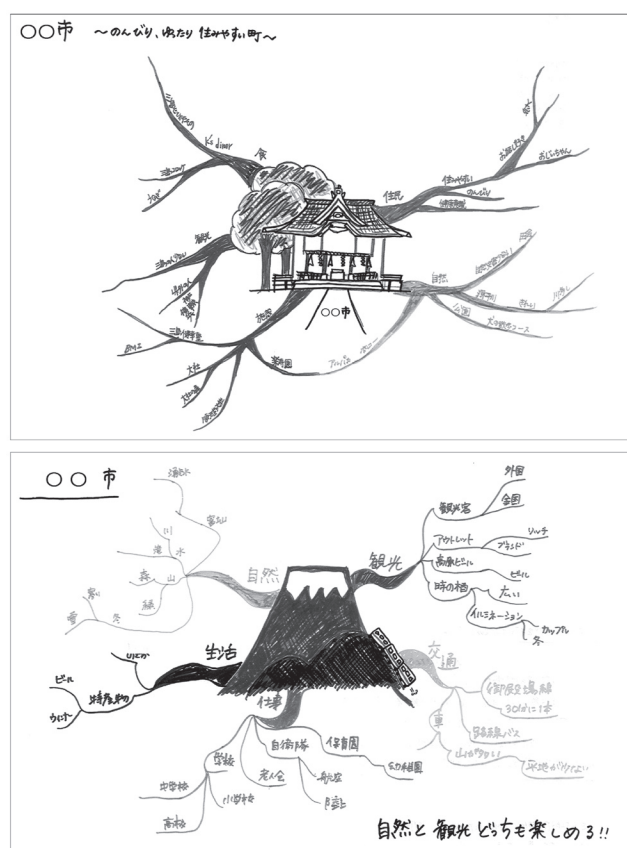


図1 学生が描いたマインドマップ例

図1に示した。上側のマインドマップは、地区視診した市町村の名所が中央に描かれており、そこから「住民」「自然」「食」「観光」「施設」の5つのキーワードとそこから連想される言葉が枝に様に伸びる線と共に示され、市町村の特徴の短文表記として「のんびり、ゆったり、住みやすい町」が挙げられている。また、下側のマインドマップは、自然環境や交通が中央に描かれており、「観光」「交通」「自然」「生活」「仕事」の5つのキーワードと連想される言葉が示され、市町村の特徴の短文表記は「自然と観光どちらも楽しめる!!」となっている。いずれのマインドマップも地区視診において得た市町村のイメージや情報が一つのまとまりとして自由に描かれていた。

2) マインドマップに示されたキーワード

中央に描かれた絵から伸びる太い枝のような線の上に示されているキーワードは、マインドマップでは基本アイディア (Basic Ordering Ideas、以下 BOI) と

表4-1 マインドマップ1枚あたりのBOI数

BOI数	件	%
2	1	(0.8)
3	20	(16.8)
4	57	(47.9)
5	35	(29.4)
6	5	(4.2)
7	1	(0.8)
合計	119	(100.0)

表4-2 BOIの頻出順位(上位10位)

順位	BOI	頻度
1	観光	57
2	交通	50
3	自然	36
4	環境	22
5	施設	20
6	食・物	15
7	教育	14
8	生活	13
9	名物	11
10	住民	9
	地域	9
	特徴	9
	歴史	9

呼ばれている。学生が描いたマインドマップ1枚あたりのBOI数と頻出BOIとして上位10位を表4-1、4-2に示した。マインドマップ1枚あたりのBOI数は、4つが最も多く57件(47.9%)、次いで5つが35件(29.4%)だった。また、最小のBOI数は2つで1件(0.8%)、最大のBOI数は7つで1件(0.8%)だった。BOIの頻出順位は、第1位が「観光」、第2位が「交通」、第3位が「自然」だった。また、上位10位に含まれたBOIのうち地域住民とその生活に関連するBOIは「食べ物」「教育」「生活」「住民」があった。なお、全てのマインドマップ119件からそれぞれBOIを抽出し、表記ゆれを統一し重複を削除すると146のBOIが認められた。

3) 市町村の特徴の短文表記例

描いたマインドマップを俯瞰してつけた市町村の特徴の短文表記について類似した内容をまとめ、その一部を例として表5に示した。地域住民やその人柄に関する短文表記としては、「大自然とあたたかい人に恵まれているまち○○(以下○○は市町村名)」「人情溢れる自然に恵まれた町○○市」などがあつた。また、

表5 市町村の特徴の短文表記例

地域住民や人柄	・大自然とあたたかい人に恵まれているまち○○ ・人情溢れる自然に恵まれた町○○市 ・自然豊か・人穏やかな○○市 ・自然たくさん 元気・笑顔たくさん みんな仲良し○○町 ・優しい人、広い町、まだまだ活性化できる○○町
健康や生活	・自然豊かで健康なまち○○ ・人・自然・食が豊かで健康な町 ・子どもが暮らしやすい○○市 ・子育ても健康もパワフル○○町 ・市民の健康を考える町○○市
環境、歴史・文化	・自然豊かで清らかな町○○町 ・○○町 自然の多い、静かな街 ・海と松と文化のまち○○ ・自然豊かな伝統ある町 ・歴史の宝庫○○市 ・シーラカンスのような市* ・あるのは歴史と緑だけ*
産 業	・水産業が活発なまち ・海と温泉、観光のまち ・山菜が輝く街、○○市 ・温泉と歴史のまち○○市 ・見るものいっぱい食もおいしい○○
主観や感覚、体験	・ゆったりとした時間を味わえる町○○市 ・心癒されるところ○○ ・住みたい街○○ ・各年代、1日中楽しめる町○○町 ・歩きやすい町○○

表中の○○は市町村名。

*ネガティブなイメージを伴う短文表記

地域住民の健康や生活に関するものでは、「自然豊かで健康なまち○○」「子どもが暮らしやすい市」などがあつた。さらに、環境、歴史・文化や産業、学生の主観や感覚、学生の体験に関する短文表記も見られた。また、全ての短文表記119件のうちポジティブなイメージを伴うものは117件(98.3%)、逆にネガティブなイメージを伴うものは環境、歴史・文化に関する短文表記のうち「シーラカンスのような市」「あるのは歴史と緑だけ」の2件(1.7%)のみだった。

4) マインドマップを用いたワークについての学生の感想例

マインドマップを用いたワークについての学生の感想について類似した内容をまとめ、その一部を例として表6に示した。感想の中には「住民の人々はどのように生活しているのかと思った。」などあらためて地域住民とその生活への関心の惹起をうかがえるものがあつた。また、「訪れた土地にあらためて親しみを感じた。」など地域への肯定的感情を実感するものもあつた。さらに「今回少なかった情報について調べてみたいと思った。」「○○市全体としての地域特性をつかみたいと思った。」など地域診断への関心の広がりも見られた。

感想の中にはマインドマップそのものに対するものもあつた。「頭の中を整理し、関連性を示すことができて、頭の中がとてもクリアになったような気がする。」「色を塗っていてとても楽しいなと思った。」などマインドマップのワークを通じて感じた快さや楽しさの経験について述べられていた。また、「これからの自分の悩みや実習で行き詰った時もこれを用いてみたいと思った。」など汎用的思考ツールとしての新たな認識した者もあつた。さらに、グループメンバー同士で行ったプレゼンテーションについて「自分からも人から見ても分かりやすい。」「グループメンバーの意見もどんどん書き込みたくなった。」などグループ学習ツールとしての肯定的認識もあつた。

表6 マインドマップを用いたワークについての学生の感想例

	感想の一部抜粋
地域住民とその生活への関心の惹起	・あらためて思い返してみても、言葉や絵にしてみると、自分たちが歩いた（視診した）範囲の全体像が見えてきた気がした。そして、買い物をする場所がなかったことに気が付き、住民の人々はどのように生活しているのかと思った。さらに、坂道が多いことに改めて驚き、高齢者が多かったが移動や買い物手段はどうしているのか？など、たくさんの疑問も一緒に生まれてきた。この疑問が「地域診断」の新たなステップにつながるのかな？と思った。 ・まだまだ枝が少ないので地区視診では様々な視点で見る必要があると感じた。表面だけではなく、住民の本心など住民性を理解できる地区視診が求められるのではないかと考えた。
地域への肯定的感情を実感	・自分がその土地を訪れて感じたこと、考えたことなどをまとめ分かりやすくイメージの絵を加えることで、訪れた土地にあらためて親しみを感じた。 ・〇〇市は自然にあふれていて人々が集まり、温かい町であると思った。マインドマップを作成することにより、花が植えられ、道路が整備され、きれいな水も流れていたことをあらためて確認することができた。
地域診断への関心の広がり	・どの分野の情報が多いか少ないかが分かり、次に調べたり地区視診したりする際には、今回少なかった情報について調べてみたいと感じた。 ・マインドマップを見てみて自分の視点に偏りがあると思った。特定の地域を見た情報はあったが、他の地域や住民の声などをもっと聞き、マップに取り入れていくことで〇〇市全体としての地域特性をつかみたいと思った。 ・今度は夜や夕方、朝など違う時間帯の様子も見てみたいと思った。
快さ、楽しさの経験	・連想して描いていくというのはとても頭を使っただけで、頭の中を整理し、関連性を示すことができて、頭の中がとてもクリアになったような気がする。 ・自分はとても絵が苦手な中での絵を描くのが難しかったが、たくさん色を使うことでモチベーションが上がり、色を塗っていてとても楽しかったと思った。 ・整理すると想像以上に小さくまとまってしまう不思議に思ったが、訪れて感じた多くのことはそれぞれ関連したり重複したりしているのだと気づき、マインドマップで自分の考えをきちんと整理することができた。 ・マインドマップは長文を羅列させるような堅苦しいものではなく、単語や一文を思いついたらまめに書き、他のものと関連させていく作業なので、あまりあれこれと迷わず気軽に描くことができた。 ・先生がおっしゃったようにマインドマップをカラフルにすることで明るい気持ちで描き進めることができた。
汎用的思考ツールとして新たに認識	・マインドマップを活用することによって情報の整理を効率的にできるので、これからの自分の悩みや実習で行き詰った時もこれを用いてみたいと思った。
グループ学習ツールとしての肯定的認識	・頭の中のことを文字ではなく図で描くため、自分からも人からも見て分かりやすい。 ・描き終えてみるともっと連想させて描けたのかなと思ったし、グループメンバーの意見もどんどん書き込みたくなった。 ・グループで自分の描いたマインドマップを発表することも、他の人の考えたこと、印象に残ったこと、視点が分かってとても面白いと思った。
自分の弱点を認識	・自分の思考をたどってみるとかなりまとまりのない思考をしているのが良く分かった。 ・自分の地区視診はまだ甘かったと良く分かった。こうして目に見える形になると足りないところが見えやすく反省もしやすいので、自分にとってプラスになったと思う。 ・なかなか思考を広げることができなかったためしっかりと記憶し、メモすることも大切だと感じた。
描画や想起の不得手さを経験	・自分の思考を文字だけではなく絵や色を使って表現することは難しかった。 ・枝の広がりを作る際には、記憶をさかのぼり掘り起こすのが少し大変であった。 ・中心に描いた絵はあまり上手く描けず、納得のいく作品を作れなかった。

ただし、逆に反省やネガティブな経験についての感想もあった。「まとまりのない思考をしているのが良く分かった。」など自分の弱点を認識したり、「絵や色を使って表現することは難しかった。」「記憶をさかのぼり掘り起こすのが少し大変であった。」など描画や想起の不得手さを経験したりしていた。

Ⅲ. 考 察

1. マインドマップの活用の効果

地域診断演習におけるマインドマップの活用の効果については、演習目的の達成、市町村に対するポジティブなイメージづけ、汎用性の3点について述べる。

本学部の地域診断演習の目的は、「地域の特性を踏まえた保健活動を展開するために人々の暮らしに関連する情報を整理・統合し、健康課題を明らかにする地域診断技術の基礎を学ぶ」ことである。この目的の中にある「人々の暮らしに関連する情報を整理・統合」が学生にとって難しいことは指摘されており^{9,19)}、本学部でもそのことに問題意識を持っていた。図1のマインドマップ例に示される通り、マインドマップは中心の絵を起点として関連する情報がまるで枝が伸びるように描かれる。また、そこに一つ一つ書き出される言葉は学生の連想によって導かれたものであり、既存資料から機械的に書き写した言葉ではない。したがって、マインドマップを描くということを通じて、全ての情報が無理なく繋がっていることを学生なりに実感しやすいことが推測される。実際に感想では「頭の中を整理し、関連性を示すことができ、頭の中がとてもクリアになったような気がする。」とあった。多くの情報に翻弄されがちな地域診断において、マインドマップは学生に「身の丈にあった」情報の整理・統合の経験をさせることができると考えられる。特にそれは地域診断の初学者の学習意欲を引き出すために有効であろう。このことは、感想の中で地域診断について「今回少なかった情報について調べてみたいと

思った。」「〇〇市全体としての地域特性をつかみたいと思った。」と関心の広がりが見られことから示唆される。また、マインドマップに示されたBOIでは、その頻出順位の上位3つにこそ入らなかったものの「食べ物」「教育」「生活」「住民」といった地域住民やその生活に関連するBOIが多く見られた。本学部では、演習の目的にある通り、地域診断において「人々の暮らしに関連する情報」を得ることを重視している。マインドマップの中でBOIとして地域住民やその生活に関連することが多く見られたことは、学生が「人々の暮らしに関連する情報」を得られていたことを示唆している。以上のことから、マインドマップの活用は地域診断演習の目的達成に効果的であったと考えられる。

次に、マインドマップ描いたり、それを俯瞰し市町村の特徴の短文表記をつけたりすることは、市町村に対するポジティブなイメージを地区視診後にあらためて確認することを促している可能性について述べる。地区視診は、実際に地域に足を運び、五感を通じて地域を生き生きと捉える機会になる。それは、学生にとって新鮮な経験であり、学生は既存資料のみからでは得られ難かった地域住民の暮らしを身近に感じたり、訪れた地域に肯定的な感覚を抱いたりすることが多い。しかし、個々の学生が得たこの貴重な感覚は、既存の情報整理のための枠組みだけでは十分に拾い上げることはできず、むしろその作業を通じて急速に色褪せたり、忘却されたりしてしまうことも少なくない。折角の地区視診をしておきながらこのような現状であることはあまりにも惜しいことである。マインドマップはその損失を解消していることが期待される。市町村の特徴の短文表記例を見ると、地域住民やその人柄をはじめとして、健康や生活、環境、歴史・文化、産業、または学生の主観や感覚、学生の体験に関すること見られた。これらほとんどの短文表記に共通していることは、いずれの短文表記もポジティブなイメージ

を伴うものであり、ネガティブなイメージを伴うものは極めて少ないことである。学生が地区視診を行ったのは静岡県東部の市町村が主で、都市部に比べて必ずしも交通や商業施設の利便性は高くない。したがって、教員の懸念としては若い世代である学生にとってこれらの市町村は関心や魅力を感じにくかったり、実際に地区視診に行ってもネガティブなイメージを持ててしまったりするのではないかということがあった。しかしながら、マインドマップに記された短文表記を見る限りにおいて、そのような懸念は十分に払拭されるものであったといえる。感想においても「訪れた土地にあらためて親しみを感じた。」など地域への肯定的感情を実感するものがあり、これは短文表記で見られたポジティブなイメージと同様だった。このようにマインドマップを描くことにより地区視診で得たポジティブな感覚をあらためて確認できていることが考えられる。さらに、地区視診した市町村を振り返る際にポジティブなイメージを助長する一因としては、「頭の中がクリアになった。」「楽しいなと思った。」と感想にもあるようにマインドマップを描く行為自体に対しての快さや楽しさも挙げられる。このようにマインドマップを描くことによってポジティブな帰結に至りやすいメカニズムとしては、学生が感想で述べているようにカラフルな着色の楽しさによって引き起こされるのか、あるいはマインドマップの放射思考という独特な思考法による影響なのか、連想によって生じた言葉を紙面に書き出しきることが一種のカタルシスになるためなのかなどについては今後慎重な検討が必要である。ただし、いずれにしても学生がマインドマップを描くこと通じて、地区視診をした市町村にポジティブなイメージを持ちやすくなることは、そこに暮らす地域住民に対する関心も高まることが期待でき、地域診断演習において効果的であると考えられる。

最後に、マインドマップの汎用性について述べる。本学部ではマインドマップを地区視診後の振り返りの

ツールとして用いた。その結果、前述の通り地域診断演習にとって望ましい効果を得ることが示唆された。しかしながら、それ以外の恩恵もマインドマップの活用によって得られていることが考えられた。例えば感想で「これからの自分の悩みや実習で行き詰った時もこれを用いてみたい」などと演習以外の活用可能性を見出し、汎用的思考ツールとして認識している者もいた。関田²⁵⁾は、マインドマップが大学生の学習支援の思考ツールとして有効であり活用方法は様々であるとしており、これは学生の感想と一致する。さらに、感想では、グループメンバー同士でマインドマップを用いて行ったプレゼンテーションについて「自分からも人からも見て分かりやすい。」などのグループ学習ツールとしての肯定的認識もあった。副島²³⁾は看護学生の実習カンファレンスにおいてマインドマップを活用したところ、発表者が話しやすく考えやすくなること、相手の伝えようとすることを理解しやすいこと、そして指導者も気づきが得られることをその効果として挙げている。また、何よりも学生がのびのびと語ることによって、お互いが集中し、思考しやすい雰囲気生まれることも経験として述べている。これは、学生の感想と一致すると共に、筆者がワークをファシリテートする際に感じることも一致する。したがって、マインドマップはその汎用性の特徴ゆえに、地区視診の振り返りのみに留まらず学生の日々の学習やグループ学習にも活用の幅を広げていけることが示唆される。なお、本学部では現在、地域診断演習の後に履修する公衆衛生看護実習Ⅰ（地域診断実習）において地域の健康課題に焦点を当てた地区視診の振り返りや、公衆衛生看護実習Ⅱ（保健活動実習）における最終カンファレンスでもマインドマップを導入している。今後、別稿においてその効果を報告したい。

2. マインドマップの活用における課題

マインドマップの活用については、前述の通りその

効果が少なくはなかったと考えられるものの、実践にあたっていくつかの配慮すべき課題もあった。それは、マインドマップを描く経験は初めての学生がほとんどでその独特な方法にすぐに適応できない者も存在することから、個別的な配慮が必要という点である。例えば、マインドマップ1枚あたりのBOI数において、1名のみではあったがBOIを2つしか挙げられない者がいた。また、感想では、描画や言葉を想起することの不得手さを経験したことについて触れていたものもあった。ワーク中では、絵の上手・下手は気にしないように伝えたり、ウォーミングアップにおいて連想によって言葉を書き出すコツを掴めるような工夫をしたりはしているものの、全ての学生がこれをすぐに行えるわけではない。したがって、ワークをリードする教員の他に、躓いている学生を個別的・積極的にサポートするための教員やティーチングアシスタントを配置し複数で対応するなどの工夫が必要であると考ええる。

3. 本稿の限界

本稿ではマインドマップの活用の効果と課題について教育実践を振り返り考察したものの、それは客観的な評価指標を用いたものではないことが限界として挙げられる。特に、紹介したマインドマップ、市町村の特徴の短文表記、そして感想はできるだけ実態を代表するものを例として選定したものの、これが恣意的でないことを証明できない。したがって、今後は質的・量的それぞれの研究的手法によって、マインドマップの活用の効果や課題を明らかにすることが望まれる。本稿は、これらの研究の起点となる実践報告として位置付けたいと考えている。

IV. 結 論

本学部では、地域診断演習の中で地区視診や地域住民へのインタビューを行った後の振り返りにおいてマインドマップの活用を試みた。その結果、効果として

は、演習目的である人々の暮らしに関連する情報の整理・統合について地域診断の初学者である学生の学びを助けること、学生の市町村に対するポジティブなイメージを促すこと、学生の日々の学習やグループ学習のツールとしての広がり期待できることが挙げられた。一方で課題としては、学生の中には描画や想起が不得手な者もいるために、彼らに対して個別的なサポートをする必要性が挙げられた。以上のことから、今後も課題の改善を図りながら引き続きマインドマップを地域診断演習に活用していきたいと考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省：地域における保健師の保健活動に関する指針、2013.
- 2) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会 第一次報告、2010.
- 3) 松尾和枝、酒井康江、蒲池千草 他：地区診断を用いた地域看護学演習の取り組みと今後の課題、日本赤十字九州国際看護大学 4、171-182、2005.
- 4) 野原真理、池尾久美、宮崎美千子 他：地域診断の授業方法に関する実践報告 学生のアンケートと学習評価から、聖母大学紀要 3、67-73、2007.
- 5) 滝澤寛子、西田厚子、今村香：地区診断と健康教育指導案作成を組み合わせた教育プログラムによる学生の学び、人間看護学研究 3、125-133、2006.
- 6) 大須賀恵子：看護大学生の地区診断技術を高める教育方法の検討 地区踏査・マッピングの導入、保健師ジャーナル 62(10)、876-881、2006.
- 7) 豊島泰子、弥永和美、今村桃子 他：地区診断における地区踏査の評価 地区踏査後にまとめた学生の記録分析から、聖マリア学院紀要 21、85-88、2007.
- 8) 鈴木知代、片山京子、鈴木みちえ 他：地域での

- 体験を重視した地域診断演習における看護学生の学び、聖隷クリストファー大学看護学部紀要 17、51-59、2009.
- 9) 野原真理、照沼美代子、若林千津子 他：本学における地域看護学の授業展開 地域診断の授業方法の評価、医療保健学研究 2、87-106、2011.
- 10) 清水美代子、永井道子、渡邊節子：保健師教育課程における地域診断演習方法を考える、日本赤十字豊田看護大学紀要 9(1)、81-88、2014.
- 11) 清水美代子、永井道子：フィールドワークを取り入れた地域診断演習における学生の学び、日本赤十字豊田看護大学紀要 9(1)、81-88、2015.
- 12) 栗原喜代子、畑中純子、後藤由紀 他：保健師教育「地域診断」演習の実施報告、四日市看護医療大学紀要 8(1)、37-44、2015.
- 13) 牛尾裕子、嶋澤順子：【地域診断のチカラをつけるー基礎教育から現任教育へ】個別事例から始める「地区診断」演習 学生の学びを深める演習用教材の工夫、保健師ジャーナル 71(4)、296-301、2015.
- 14) 矢島正榮、小林亜由美、小林和成 他：保健師基礎教育における地区診断演習の取り組み、群馬パース大学紀要 6、119-125、2008.
- 15) 時舘千鶴子、下屋敷昌子、立身政信：地域保健実習からみた地区把握における地区踏査の意義、岩手公衆衛生学会誌 14(1)、23-31、2002.
- 16) 榎本妙子、三橋美和、堀井節子 他：保健師基礎教育課程における地区診断技術教育の一方法「地区視診ガイドライン」の因子構造から、日本地域看護学会誌 9(1)、26-31、2006.
- 17) 西嶋真理子：地域看護実習における地域看護診断の学習過程、日本地域看護学会誌 9(2)、98-105、2007.
- 18) 菅原京子、後藤順子、太田絢子 他：【このままでいいのか臨地実習 現場の課題と、そこでの工夫】わたしたち、こんな実習をしています 4年制大学における実習 山形県立保健医療大学 地域看護診断を主要な目標とした実習、保健師ジャーナル 64(5)、420-425、2008.
- 19) 馬場文、飯降聖子、小林孝子 他：地域診断に関する学生の理解度の検討 実習前後の比較から、人間看護学研究 13、59-70、2015.
- 20) 小林恵子、齋藤智子、成田太一 他：活動報告 地域看護診断実習と連動した保健所、市町村、地域住民と大学との協働、保健師ジャーナル 72(1)、60-65、2016.
- 21) Tony Buzan, Barry Buzan : The Mind Map, 2003, 神田昌典、ザ・マインドマップ 第11版、55-61、ダイヤモンド社、2008.
- 22) 本田芳香：【アセスメント力と思考力を磨く！わかりやすい看護過程の教え方】マインドマップを活用した看護過程演習の展開方法、看護人材育成 13(2)、41-47、2016.
- 23) 副島和美：皆で「A HA!」を共有！実習カンファレンスでのマインドマップ活用、Nursing BUSINESS 8(4)、359-361、2014.
- 24) 高石会里、永江誠治、花田裕子：マインドマップによる看護学生のコミュニケーションの変化の検討、保健学研究 22(1)、33-39、2009.
- 25) 関田和彦、山崎めぐみ、上田誠司：授業に生かすマインドマップ 初版、ナカニシヤ出版、京都府、5-7、2016.